

人だけが正規の兵士のように思われました。

兵士たちは、井戸の中に板切れなどを投げ込みながら主人と何か話していました。あとで主人に聞くと「引き揚げ船が来るまでいるように」と言つて帰つて行つたとのことです。

翌朝早く囚人兵二人がやつて来て、私を若い娘さんと思ひ込み「連れていく」と言い出しました。私は、主人に「十四歳以上の若い娘さんは、どこかに隠れるように言つて下さい。私、死ぬ覚悟はできています」と言い残し、兵士に従いました。

実際は、前後に小銃を突きつけられ、生きた心地もしませんでした。

連れて行かれるうちに、何とか逃げられないだろうかと思ひ、三村さんの鶏小屋の前に差し掛かった時で

す。私は、大きな声で「あー！」と叫びました。兵士は、驚いて飛び散りました。その一瞬のすきに、鶏小屋に飛び込み、髪をほどき、ワンピースを裏側にして着、草の汁を顔に塗り、手足に土をつけ、裸足になりました。

周辺に人影がないのを確かめ、先ほど来た道を歩き出しました。死ぬ覚悟はできているとはいへ、「あつ、ソ連兵に見つかった」冷汗でびっしょり。ところが、あまりのきたない格好に、銃で追い払われました。

兵士の姿が見えなくなると、一目散で皆さんが集まっている所に駆け込み、顔を隠して座り込みました。

すぐそばで、私の二歳になる息子は「お母さん、お母さん」と呼び、主人は「お母さんはすぐに帰つてく

るから」となだめています。しばらくしてから、やっと主人は私に気付きました。家に入って鏡で自分の姿を見て、あまりのきたなさに、我れながら情けなく思いました。

その夜から、三カ所でフライパンを持って見張ることになりました。女性たちは、天井に隠れていることになりました。塗り天井なので、梁（はり）の上になければなりません。

ある日、娘と二人で梁の上に隠れていると、目の前に銃剣が突き出てきました。娘が声を出しそうになつたので、思わず口をふさぎました。二人とも生きた心地がしませんでした。

いつも、できるだけきたない顔にしていなければなりません。そこで、なべ底の墨を塗るのですが、夏のた